

水と現代における諸問題

「トイレで水を一回流すと子供が一人死ぬんやで！」

これは、ある友人の言葉である。この言葉を言われたのは実に1年程前のことであったが、当時は「はあ、じゃあ気をつける。」などと言ったものの、何がどうして人が一人死ぬかなどはまったくわからなかった。もしかしたら、一回水を流す分の水道料金で薬が買え、途上国の子供たちの命が救えるのではないだろうかなどと想像を膨らませたのであるが、少なくとも一回は水を流さなければ水洗トイレは利用できないので、仕方がないことだろうと納得し、その場を後にした。しかしこの冬、水の授業を受けて私はまたこの言葉を思い出し、その友人に、あの言葉の意味を聞いてみた。すると、このような答えが返ってきた。水洗トイレで一回に流す水の量は、人間が一日に必要とする水約2リットルに匹敵するのだと。つまり、人が一日で必要とする水の摂取量は2リットルであるが、この2リットルですら確保するのに危うい人々が世界には存在するという事実を意味しているのである。

日本は山に積もった雪解け水由来の湧き水や河川が多く、水の豊かな国である。トイレで水を流すことはもちろん、風呂やシャワーを毎日利用し、食器洗いや洗濯にも惜しみなく水を使う。東京に住む人一人が一日に使う水の量は370-380リットルであると言われている(1)。当初の私の意見からも伺えることであるが、水は蛇口をひねれば出てくるもので、公共の施設や公園でも簡単に手に入るものである。よって、薬や食料と違い人間の命を左右するもののだとは、当然思われていないのだ。日本に住む人々はこの恵まれた環境から、水に対する意識が非常に低く、水は限りなく存在するものであると認識している。しかし、水は今や限りある資源なのだ。

地球は水の惑星であると呼ばれているように、地球の表面積の約七割が海であり、見た目上水は十分に存在している。しかし、それらの海水と比べて、淡水はこの約3%程しか存在しない。その上淡水であっても人間には利用できない種の淡水が多く存在する。それがバイカル湖の水や地下に凍って存在する線数百年前の水、また北極南極で凍っている水や氷河などで、それらを差し引くと実際に人間が利用できる水というのは全体の0.01%足らずなのである(1)。更にこの0.01%のうち、70%が農業用水であると考えられている。例えばとうもろこし1トンを生産するのに1000トンもの水を必要とし、同じように300グラムの牛肉にはプルー一杯分の水が使用されている。この農産物や家畜を水の必要量に例える考え方を「仮想水(virtual water)」と言い、近年話題になっている(1)。この仮想水の考え方を利用すると、世界トップクラスの食糧輸入国である日本は、他国から大量の水を買っているということになる。

また、近年では石油資源の枯渇が懸念されており、農作物(とうもろこしやさとうき

びなど)を発酵させて得られるエタノールを化石燃料の代わりに利用する、バイオ燃料という技術が脚光を浴びるようになった。この燃料を燃やす際に生じる二酸化炭素は本来植物が混合性による炭素固定で産出されたものであるため、従来の化石燃料より環境に対する危険性が少ないとされており、環境にも優しいという点で温暖化対策の面からも注目を浴びている。しかしこの原料であるとうもろこしやさとうきびを栽培する際に、収穫量の千倍もの水が使用されている。実際に産地である中国やインドでは水不足や食料事情の悪化が懸念されている(2)。

また、水を大量に消費するのは農業だけではない。ペルーのヤナコチャ金鉱山では鉱山を運営するアメリカのニューモント・マイング社が「地下水を枯渇させて住民の飲料水を奪った」として住民の非難を浴びている。金の抽出にはシアン化物溶液を使用するため、採鉱量が増えるにつれて水の使用量も増える。地域住民はこれまでの土地をめぐる戦いに対して、水をめぐる戦いであるとして抗議活動を続けており、死者もでる惨事となっている(3)。

このような状況下では、世界全体がおだやかではない。20世紀は「石油の時代」であったと嘆かれていたが、21世紀はもはや「水の時代」になろうとしているのだ。農業や工業で大量の水が消費される中、残り少ない水資源をめぐる紛争が勃発しており、結果しわ寄せはすべて貧困層に現れているという現状が横たわっている。水という資源は、今や現代が抱える数多くの問題に深く関わっているのである。

文明はいつの時代も大型河川や湖の近くで育まれてきた。今でも実に人口の60%は水源となる河川の近くに住んでいるといわれている(1)。しかし、残りの人間の住む地域には水へのアクセスが乏しく、世界では一日20リットルの水を手に入れるために30分歩かなければならない人が11億人いるといわれている。インドではこの水を運ぶ作業は婦女子の仕事で、ジェンダーとはまた違った原因から子供の就学が困難な状況が続いている(4)。また26億人がトイレなどの衛生設備を利用できておらず、この6割から8割の人々はアジア、太平洋地域で生活している。またこの不衛生な環境が水質汚濁を引き起こしており、発展途上国の人口の約半分が汚染された水源を使用することになり、水に関連する病気で年間340万人が死亡、そのほとんどが子供であるという(5)。清潔な淡水が2リットル手に入れば子供の命が助かるという言葉の由来はここにあったのだ。

そんな中、2000年にボリビアのコチャバンバで紛争が起こった。その原因は、石油でもなく土地でもなく、水であった。今まで市営水道サービスが行っていた水の供給が世界銀行の手引きの中で民営化され、米ベクトル社が40年間の契約を交わしたのが事の発端であった。民営化されたことによって水道料金は地域によって40-300%の値上げが行われ、現地住民の日給の1/3が水道料金に割り当てられた。この結果を受けて2000年1月に住民による4日間のストライキが勃発し、一時は政府が水の価格を元に戻すことを約束したことで自体は収束したが、民営の水道会社撤退が決定する4月まで

コチャバンバの住民は戦い続け、デモ行進では政府による催涙ガスの噴射で6名の死者と100人を越える負傷者を出し、子供2人が失明した(6)。政府が先進国主導の営利集団とあいまみえて水道局を運営、住民から「水質向上」を口約束に高額の金をむしりとる。水は生命の維持に欠かすことの出来ない人間の権利から、商品に変わってしまったのだ。これをコチャバンバ水紛争と呼ぶが、こういった紛争は、今や世界ではまれに見るケースではない。

世界銀行や国際通貨基金は世界の水道民営化市場の77%を事実上独占しており、最近の数年間、16の貧しい国々で水の民営化を強制してきた。その中のいくつかは、ベニン、ニジェール、モザンビーク、ルアンダ、イエメン、タンザニア、カメルーン、ホンジュラス、ニカラグアといった、世界の最貧国である(7)。企業側は国家の非能率さによる後進性で破産した国の近代化を助けるという名目で事を運んでいるが、実際のところこれらは、水をめぐった新しいビジネスなのである。人間にとって必要不可欠である物に需要は必ず発生し、需要のあるところには必ず商売がからむ。こういった水は「権利」ではなく「商品」であるという考えが水戦争と言う名の奪い合いを促しており、時には血を流す結果を招いているのだ。

しかし中には住民の強い抵抗が経済的強者に、血を流すことなく勝利した例もある。ウルグアイでは2004年10月31日に、水道事業の民営化を阻止するための憲法改正のために国民投票が行われた。結果は投票総数の64.5%が改正に賛成を投じ、水道が公共の事業であり、全員の権利であることを確定したのだ(7)。これは国民の「物を管理する能力が自分たちにはない」という、経済的弱者の無力感に民主主義が勝利した結果であったのだ。この常に勝利するものたちに弱者が勝利したという事実は、今後の水戦争での大きな礎になるのではないだろうか。

しかしながらこのような事例は実にまれであり、権力者が世界の経済を牛耳っている限り事態は一向に良くはならない。2000年にハーグで開かれた「世界水フォーラム」ではなんと、「水は人間にとって必需品であるが、権利(人権)ではない」と採択した。採択したのは国連と世界銀行であるが、それを後押ししたのはグローバル企業と営利目的の水道企業である(8)。必需品であるが権利ではないのだから、金のあるものは水を手に入れられるが、貧乏人は手に入らないという経済の鉄則が、公に水にまで適応されてしまう結果となったのだ。

日本という国に住む私達にとっては、水は捨てるでも捨てるでも蛇口をひねれば出てくる、空気のようなものである。しかし世界ではこの水資源をめぐって血を争う紛争が頻発しているのだ。ここでコチャバンバ水紛争の際に住民側が民営水道会社に対して掲げた声明文の一部引用する。「水は大地と全ての生物のものにして神聖にして犯す事ができないものであり、全世界の水資源は温存され、営繕され、保護されて子孫に伝えられ、その自然の状態が尊重されなければならない。」(9)。本来水とは人間にとってどんな存在であり、またあり続けなければならないのかがこの一文を読むと納得できるのではない

だろうか。各国政府が十分に金銭的な力をつけ、国営の水道局を開局し、貧富の差なく安価で市民に供給する事が出来ればそれにこしたことはないが、そうはいかない。世界は常に動いているのだ。日本に住む私達がいくらトイレの水を流すことをやめても、水を得ることの出来ない子供たちの生命には直接関わりはないとってしまえばそれは事実である。しかし、この量の水が生命を育み、人々が欲し、またお金儲けの道具となってしまうている真実を胸に刻む意識を持つことが、この「トイレで水を一回流すと子供が一人死ぬ」という言葉の意味なのだ。

<参考>

(1)高橋 一生先生の大学講義より抜粋 『世界の水問題の現状』 地球環境論 国際基督教大学
2007年10月12,15日

(2)MNS 産経ニュース バイオ燃料生産拡大で水不足、食糧難加速と予測 <
<http://sankei.jp.msn.com/life/environment/080122/env0801221016000-n1.htm>> 2008年1月
22日

(3)JANJAN ペルー:金鉱のために失われる水

<<http://www.news.janjan.jp/world/0610/0610012039/1.php>> 2006年10月2日

(4)JANJAN インド:就学を妨げる水不足

<<http://www.news.janjan.jp/world/0710/0710153951/1.php>> 2007年10月16日

(5)日本水フォーラム JWF の目的 <<http://www.waterforum.jp/jpn/index.html>> 2004年

(6)コーポレート・ヨーロッパ・オブザーバトリ, トランスナショナル研究所 『世界の<水道民営
化>実態』 作品社 2007年4月

(7)エドアルド・ガレアノ 『戦争は嘘をつく』 ボルテール・ネット

<<http://www.voltairenet.org/article127981.html>> 2005年9月15日

(8)モード・バロウ, トニー・クラーク 『「水」戦争の世紀』 集英社 2003年12月

(9)wikipedia

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>>